

主イエスは苦難によって罪と闘ってくださったということ。それゆえ、苦難の時には赦されて主と共に生きることが実現する時となるのです。主イエスはこの苦しみと無関係な方ではない、むしろ苦しみを共にされる味方としてここにおられる。それが慰めとなるのです。普通は苦難に意味はない方が良くない方が良いのです。しかし、人が生きる時に苦難は避けることはできません。人生はいばらの道を歩くようなものです。様々な傷にひつかかれ、血をにじませているのです。

苦難にあるものを慰めることができるのは、主の苦しみによって救われたことで生きる生き方がある、そして立ち直れることを示すことができるからです。そこに私たち自身が慰めを与えることのできる道が与えられるのです。「わたしも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。」ということができるとです。

パウロはこの手紙の七章で「8あの手紙によつてあなたがたを悲しませたとしても、わたしは後悔しません。確かに、あの手紙が一時にもせよ、あなたがたを悲しませたことは知っています。たとえ後悔したとしても、9今は喜んでいきます。あなたがたがただ悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めたからです。あなたがたが悲しんだのは神の御心に適ったことなので、わたしたちからは何の害も受けずに済みました。10神の御心に適った悲しみは、取り消されることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ、世の悲しみは死をもたらしません。」

神の御心に適った悲しみというのは、悲しみの中で神が近づき、その悲しみをご自分も

味わい、悲しむものの慰めとなつてくださることです。それが取り消されることのない救いに通じるというのです。悔い改めは向きを変換することです。

これはパウロだけが持っていた信仰ではありません。主イエスは最後に弟子たちと共に過されたとき、ペトロに対して(ルカ二・三一〜三二)「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直つたら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」と言われました。

ペトロは、捕らえられた主イエスの後を追つて大祭司の庭にまでついて行きますが、「お前もあの連中の仲間だ」言われたときには堪え切れずにそうではないと言い、外に出て泣き崩れます。

主イエスは「立ち直つたら兄弟たちを力づけなさい」と言われました。教会の歩みはここから始まりました。そして今でも慰めを受け立ち直つて力づけることができます。

この危機にあつて多くの教会が苦しんでいます。息の詰まる忍耐の時です。しかし、わたしたちはこの時こそ慰めを受け、慰めを伝えることができるのです。こうして礼拝に連なることによつてそこから生きることによつて、今日はこの困難の中にあつて洗礼式を行います。神がこのように慰めを与えてくださつたことを覚えて感謝します。

(一〇月一日教会創立記念日共同礼拝)

八月講壇一覽

第一主日(八月一日) 創立記念礼拝

共同礼拝 高橋和人牧師

「過ちと赦し」

列王記上 八・三三〜三四

マタイ 六・一四〜一五

第二主日(八月八日)

共同礼拝 高橋和人牧師

「顔に出さずに」

イザヤ 五八・三〜五

マタイ 六・一六〜一八

第三主日(八月十五日)

共同礼拝 姜涇米牧師

「すべて神の栄光を現すために」

詩編 二四・一b〜二

一コリント 一〇・二三〜三一・一

第四主日(八月二十二日)

共同礼拝 高橋和人牧師

「心のあるところ」

ヨシユア 七・一〇〜一三

マタイ 六・一九〜二一

第五主日(八月二十九日)

共同礼拝 高橋和人牧師

「男と女が共に礼拝する」

創世記 二・一八〜二五

一コリント 一一・二〜一六

八月の祈り

主にある平和が世界にもたらされるように。平和を求めて祈り、平和に向けて歩むことができるように。

神の平和の御心を求めるものが増し加えられるように。

教会が平和の御言葉を力強く語り、伝道が力づけられるように。